

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520358

研究課題名(和文) 宋代における蘇軾・黄庭堅集の整理・編纂と注釈に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Compilation of Collections of Literary Works of Su Shi and Huang Tingjian in the Song Period

研究代表者

浅見 洋二 (asami, yoji)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70184158

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国宋代における別集(個人の詩文集)の整理・編纂、および別集に附された注釈をめぐる諸問題について、文学論的視点および社会文化論的視点などの総合的な視点から考察を加えるものである。主たる対象として取りあげるのは北宋の蘇軾・黄庭堅の詩文集であるが、欧陽脩・陸游・楊万里など他の宋代文人の詩文集をも視野に入れるかたちで考察を進めた。

研究成果の概要(英文)：This research studied the compilations and the annotation of collections of literary works of Su Shi and Huang Tingjian in the Song period from the perspective of literary theory and social culture. The subjects of survey are not only collections of Su Shi and Huang Tingjian, but also are of other authors.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：宋代 蘇軾 黄庭堅 別集 注釈 真蹟 石刻

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者(浅見)の研究「中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究 「編年」、「分類」、そして「注釈」をめぐる問題を基軸として」(平成 17~20 年度科学研究費補助金・基盤研究(C))を踏まえつつ、それを一層発展させるものとして計画された。これは、宋代を中心とする時期の中国における詩文集、特に別集の編纂に関して、「編年」、「分類」、そして「注釈」をめぐる問題を基軸に据えつつ、文学論および社会文化論の視点から考察することを目的として行われたものであり、概要は次の通りである。

一般的に言って、詩文集の編纂は何らかの文学観に基づいて行われると考えられる。この研究においては、宋代に確立する「編年」という別集編纂法に現れた宋代文人の文学観を検討することにより、宋代以前には明確には存在しなかった文学観、すなわち「編年」に現れた歴史主義的文学観などを明らかにした。また、宋代に編纂された別集に附される「注釈」、特に蘇軾・黄庭堅の詩集に附される宋人の「注釈」に着目し、そこにあらわれた特質について検討した。

この研究によって、蘇軾・黄庭堅詩注において作者の真蹟(親筆原稿)もしくはそれに準ずる石刻などの文献資料が積極的に活用されていたこと、そこには作品のテキストの多様性を掘りあげ、テキストの生成・変化のプロセスを検討しようとする文学論的視点が認められることなどを明らかにした。更には、これらの「注釈」における真蹟や石刻の活用の実態を通して、宋代においてすなわち文学作品はどのように作られ、どのように筆写・刊刻され、どのように流通して読者の元へ届けられたのか、すなわち文学作品の制作・受容・交換・流通を取り巻く社会文化論的状況の一端を明らかにすることができた(その成果は幾つかの著書・論文において公表した)。

これまでの研究を通して、研究代表者は上述のような成果を得ることができたが、しかし研究の視点・方法の面において限られたものであり、なお不十分な点を多くのこしている。本研究は、その反省のうえに立って、より総合的な視点からの考察を試みる。研究の視点・方法については総合化を目指すのが、その一方で、研究の対象については蘇軾・黄庭堅集に絞って、より限定した形で行う。いたずらに対象を広げることによって、問題が拡散してしまうことを避けるためである。

2. 研究の目的

本研究において解明を目指す問題は、大きくは次の二つに集約される。

() 宋代における蘇軾・黄庭堅集の整理・編纂史に関する問題。

() 宋代における蘇軾・黄庭堅集の注釈に関する問題。

それぞれの概略は次の通りである。

() 宋代には、出版文化の隆盛に伴って詩文集(別集および総集)の編纂が盛んになる。当時刊刻された版本の一部が現在にまで伝えられるだけでなく、同じ宋代の文人が記した序文・跋文等の資料も数多くのこされるに至る。別集の編纂状況を考察するうえで、宋代はそれ以前の時代とは比較にならないほどのメリットを有していると言える。それにも関わらず、具体的な状況についてはなお未解明の部分が多くのことされている。それは蘇軾・黄庭堅集についても同様である。ここでは、時代については明清期を視野に入れつつも、特に宋金元朝期に重点をおいて蘇軾・黄庭堅集の整理・編纂史を総合的に明らかにする。具体的には次の四点に集約される。

(1) 別集と言ってもその中身はさまざまである。詩集・文集・詩文合集、それぞれによって整理・編纂の状況は大きく異なっている。特に詩集と文集・詩文合集の違いを明らかにする。

(2) 蘇軾・黄庭堅集の他と異なる特徴の一つに書簡(書・尺牘)が多く収められた点が挙げられる。また、書簡だけを収めた集も編まれている点も注目される。書と尺牘の収録状況を手がかりにして、各種の蘇軾・黄庭堅集の系譜を明らかにする。

(3) 蘇軾・黄庭堅の場合、宋代において既に年譜が編まれている。年譜の編纂は、別集の編纂とも密接な関係を有していた。作品の編年による整理はもちろんのこと、集本未収の作品の輯録という点から見ても年譜が果たした役割は大きい。これらの点を中心に別集の編纂と年譜の編纂との関連を明らかにする。

(4) 蘇軾集の場合、『外制集』、『内制集』といったいわば行政文書(公文書)類を収めた集が編まれている。この種の集が編まれるようになったことも宋代の特徴の一つである。歐陽脩など他の文人の事例も視野に入れながら、これらの集の整理・編纂の実態を明らかにする。

() 宋代には別集の編纂が盛んになるのに伴って、別集に注釈を附すことも行われるようになる。杜甫や韓愈など宋代以前の文人の集に加えて、同じ宋代の文人の別集にも注釈が附された。それら宋代に編まれた各種別集注本の中でも、質量ともに最も充実しているのは、蘇軾・黄庭堅の詩集注本である。ここでは、杜甫・韓愈・王安石・陳師道・陳与義などの別集注本も視野に入れながら、蘇軾・黄庭堅詩注の編纂の実態、およびそこに現れた文学論的・社会文化論的な諸問題について考察を加える。具体的には次の三点に集約される。

(1) 蘇軾・黄庭堅詩注に見られる特徴の一つとして、真蹟・石刻、すなわち作者の親筆稿本もしくはそれに準ずるテキストが積極的に活用されている点が挙げられる。これらのテキストは集本として制定される以前の段

階にあるテキストの多様な姿を伝えるものである。これらのテキストの採録状況を宋代の各種資料（特に題跋等）を参照しつつ整理する。

(2)蘇軾・黄庭堅詩注における真蹟・石刻の活用には、作品の定本（最終稿）がどのようにして形成されていったかを考察しようとする文学論的視点が見て取れる。これらを中心にして、蘇軾・黄庭堅詩注に現れた文学観の特質を明らかにする。

(3)蘇軾・黄庭堅詩注における真蹟・石刻の活用は、生身の作者や作詩の現場に密接した情報を伝える資料として重要である。これらのテキストを通して、当時、詩のテキストがどのように制作・受容・伝承されていたのか、どのようにして集本へと整理・編纂されていたのかといった問題を中心にして、詩のテキストを取り巻く社会文化論的な環境を明らかにする。

3. 研究の方法

宋代における別集編纂に関する従来の研究のほとんどは、書誌学的・文献学的視点に立って行われてきた。それらの研究において最終的に目指されているのは、より完全なテキストを確定することであると言ってもよいだろう。本研究は、それら書誌学的・文献学的研究とは基本的な問題意識を異にしている。つまり、蘇軾・黄庭堅集の完全なテキストを確定しようとするのではなく、宋代における別集という書物の整理・編纂のプロセスやそこに附された注釈の持つ文学論的・社会文化論的な意味を明らかにしようとするものである。

本研究は、宋代の文学観あるいは宋代文学の社会文化的背景に関する研究という視点から、別集の整理・編纂、あるいは注釈について考察するものであるが、もとより宋代の文学観あるいは宋代文学の社会文化的背景に関する研究それ自体はこれまで盛んに行われてきている。だが、それらの研究は個別の作品を対象として行われることが多く、個別の作品を収める書物（別集）のあり方についてはあまり注目されてこなかった。作品とは、別集という具体的な書物という形をとって初めて確固たる存在となり得るものである。したがって、別集への着目は必要不可欠である。その意味では、従来研究には重大な不足があると言わざるを得ない。本研究はその不足を補おうとする点において、方法論的な独創性を有している。

本研究は、祝尚書『宋人別集叙録』、笈文生・野村鮎子『四庫提要北宋五十家研究』『四庫提要南宋五十家研究』等をはじめとする宋代の別集に関する書誌学・文献学的研究の成果、そして蘇軾・黄庭堅等の宋代文学をめぐる文学論的・社会文化論的研究の成果を踏まえつつ総合的な視点のもとに行われる。これまでの研究においては、書誌学・文献学的視点からの研究と、文学論的・社会文化論的視

点からの研究とが別個の研究として行われていて、両者の有機的な連関は図られてこなかった。本研究は、それらの間に架橋する形で行われるものであり、宋代を中心とする中国文学研究における新たな問題領域を切りひらこうとする。

先述のように、本研究は大きくは次の二つを基軸に据えて進められる。

() 宋代における蘇軾・黄庭堅集の整理・編纂史に関する研究。

() 宋代における蘇軾・黄庭堅集の注釈に関する研究。

上記()に関しては、具体的には次のような研究に重点を置いて行う。

(1)詩集と文集・詩文合集の違いを中心にした蘇軾・黄庭堅集の整理に関する研究。蘇軾集について言えば、『東坡集』『東坡後集』と王十朋編の分類詩注、施元之・施宿等編の編年詩注の相互比較などを手がかりとする。

(2)書と尺牘の収録状況を手がかりにした蘇軾・黄庭堅集の系譜に関する研究。蘇軾集について言えば、『東坡集』『東坡後集』と『東坡外集』との比較、あるいは蘇軾・黄庭堅の尺牘専集の編纂などを中心に行う。

(3)蘇軾・黄庭堅集と蘇軾・黄庭堅年譜との関連に関する研究。施宿等編の蘇軾年譜、黄シユン編の黄庭堅年譜を手がかりとする。特に黄シユン『山谷年譜』の検討に重点を置く。

(4)蘇軾『外制集』『内制集』に関する研究。歐陽脩の内外制集、更には唐・白居易の内外制集との比較を手がかりとする。

上記()に関しては、具体的には次のような研究に重点を置いて行う。

(1)蘇軾・黄庭堅詩注における真蹟・石刻の活用に関する資料整理研究。施宿等の蘇軾詩注、任淵・史容等の黄庭堅詩注の検討を中心に行う。以下、同様。

(2)蘇軾・黄庭堅詩注における真蹟・石刻の活用に現れた文学観に関する文学論的研究。詩注以外にも、宋編の各種詩話等との比較検討を行う。

(3)蘇軾・黄庭堅詩注における真蹟・石刻の活用に現れた詩の制作・受容・伝承のあり方に関する社会文化論的研究。詩注、詩話以外にも、南宋文人の文集に多く収められる各種の題跋をも視野に入れて検討を進める。

上記研究を遂行するにあたって、研究期間の前半は、全体の基礎となる研究に重点を置いて進める。まずは最も基礎的な作業として、先行研究の成果を基に、宋代に編纂された蘇軾・黄庭堅集をはじめとする各種別集について、その編纂状況を幅広く検討し、整理する。既に散佚したものについては、残された序文や跋文、書目類等を手がかりにして、その編纂状況を可能な限り復元する。こうした作業は研究期間全体を通じて行うが、期間の後半には、徐々に発展的な研究へと比重を移してゆく。途中段階の研究成果については、中国・台湾の学会において発表し、その結果をフィードバックする。

4. 研究成果

以下、各年度別に研究成果の概要を述べる。
【平成 22 年度】

本年度は、四年間の研究期間の初年度に当たるため、全体の基礎となる研究に重点を置いて研究を進めた。

まずは、宋代に編纂された蘇軾・黄庭堅集の編纂状況を整理する作業に着手し、その一環として、早稲田大学・お茶の水女子大学などで宋代の別集をはじめとする関連資料の調査を行った。

上記作業と並行して、主に(1)宋代の文集に附された注釈に関する研究、(2)文集の整理・編纂における真蹟・石刻資料の活用に関する研究とを行った。

(1)に関しては、黄庭堅の詩集に附された任淵の注釈を中心に取りあげ、特に韓愈集の注釈と比較するかたちで、その全体像と文学詩的特質に関する検討を行い、黄庭堅の詩集の編纂過程における注釈の果たした役割を明らかにした。特に、『山谷年譜』を黄庭堅詩集の注釈史のなかに位置づけたこと、またそれが果たした役割を明らかにしたことは、本研究の重要な成果となった。その成果は、『中山大学学報』に中国語論文「黄庭堅詩注的形成与黄氏『山谷年譜』以真蹟及石刻的利用为中心」として発表した。

(2)に関しては、黄庭堅の詩集に加えて、欧陽脩の文集を中心に取りあげ、その全体像と文学詩的特質に関する検討を行った。欧陽脩の文集の整理・編纂に関するこのような視点からの研究はこれまでになく、その点で重要な意義を持つ成果である。その成果は前掲(1)の論文に加えて、『文学』に論文「中国宋代における生成論の形成 欧陽脩『集古録跋尾』から周必大『欧陽文忠公集』へ」として発表した。

上記(1)(2)によって、宋代の詩文集の注釈において作者親筆の草稿およびそれに類する文献資料の持つ意味が明確に認識されていたこと、またそれらの資料に基づいて生成論的な文学研究の視点が形づくられてきたことなどを明らかにした点で少なからぬ意義を有する。

【平成 23 年度】

本年度は、前年度に引き続き全体の基礎となる研究に重点を置いて進めるとともに幾つかの発展的研究に進んだ。

まずは最も基礎的な作業として、宋代に編纂された蘇軾・黄庭堅集をはじめとする各種別集について、その編纂状況を幅広く検討し整理した。上記の基礎作業と並行して、蘇軾・黄庭堅集における「詩集」と「詩文合集」の違いに関する研究を行った。

また、蘇軾・黄庭堅詩の注釈に活用される真蹟・石刻等のテキストに関して、これまでの研究成果を踏まえて発展的な研究を行った。これらのテキストの採録状況を宋代の各種資料(特に題跋等)を参照しつつ整理する

とともに、そこに現れた文学観の特質を明らかにした。その概要は次の通りである。

真蹟・石刻等のテキストは、集本として制定される以前の段階にあるテキストの多様な姿を伝えるものである。宋代には、それまで注目されてこなかった文学作品のテキストの多様な姿に対する関心が高まることによって、文学作品の生成過程を明らかにする研究姿勢が文人たちの間に広く見られるに至る。

本年度は特に上記の研究と連動する形で欧陽脩集に関する研究を行い、その研究成果については、2011年9月に中国開封にて開催された宋代文学に関する国際シンポジウムにおいて「宋代文本生成論之形成—從欧陽脩撰『集古録跋尾』到周必大編『欧陽文忠公集』」と題する口頭発表を行った。

【平成 24 年度】

本年度は、前年度に引き続き全体の基礎となる研究を進めつつ、幾つかの発展的研究を進めた。

まずは最も基礎的な作業として、宋代に編纂された蘇軾・黄庭堅集をはじめとする各種別集の編纂状況を検討し整理した。本年度は特に、南宋の楊万里・陸游の別集について重点的に進めた。

楊万里・陸游の別集については、作者生存中から、作者自身による詩集の編纂が行われており、またかかる詩集編纂について作者自身が語ってくれる資料も少なからずのこされている。そうした資料を中心に検討することにより、「小集」と呼ばれる詩集の編纂方式の具体的なあり方を明らかにするとともに、かかる編纂方式のなかで詩人たちがどのように自らの作詩を捉え返していったかについて検討を加えた。また、蘇軾・黄庭堅集に関しては、前年度に引き続き、その注釈における真蹟・石刻テキストの活用状況とそこに反映される文学観について、欧陽脩集をも視野に入れながら検討を進めた。

【平成 25 年度】

本年度は特に、陸游・楊万里ら南宋文人の別集を視野に入れながら、年譜との関連からみた蘇軾・黄庭堅集の編纂過程に関する研究、書と尺牘の収録状況を手がかりとした蘇軾・黄庭堅集の伝承過程に関する研究、そして蘇軾・黄庭堅詩注における真蹟・石刻資料の活用に関する研究に重点を置いて研究を進めた。

上述の研究によって、宋代における年譜編纂と詩文集編纂とが密接な連関のもとに行われていたこと、いったん成立した詩文集に親族や知友の所蔵する書簡などが増補されていったこと、またかかるプライベートな資料群が注釈というかたちで詩文集の編纂に活用されていたことなどを、蘇軾・黄庭堅のみならず、陸游・楊万里の別集に即しても明らかにした。従来別の別集研究には見られない視点からの研究として少なからぬ意義を有するであろう。楊万里、陸游に関する研究成

果については、論文や、中国贛州にて開催された宋代文学に関する国際シンポジウムにおいて口頭発表した。また、台湾花蓮にて開催されたテキストの受容・解釈に関する国際シンポジウムにて、本研究全体に関わる研究報告を行った。

以上、全研究期間を通じての研究成果については、以下にあげる論文・図書や学会発表のかたちで公表したほか、『中国文学テキストの諸相』（仮題）と題する専著を刊行すべく、現在執筆中である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

浅見洋二，眼中に歴歴として颯風を見る 陸游の詩にうたわれた楽土としての農村，『懐徳』，82，p.35-p.45，2014，無

浅見洋二，李学逵「草堂倭館詞」訳注稿，『大阪大学大学院文学研究科紀要』，53，p.41-p.65，2013，無

浅見洋二，子どもの情景 楊万里の詩について，『創文』，1，p.4-p.6，2011，無

浅見洋二，黄庭堅詩注的形成与黄氏『山谷年譜』 以真蹟及石刻の利用为中心，『中山大学学报』，51-2，p.24-p.37，2011，有

浅見洋二，中国宋代における生成論の形成 欧陽脩『集古録跋尾』から周必大『欧陽文忠公集』へ，『文学』，11-5，p.173-p.187，2010，無

〔学会発表〕(計 3 件)

浅見洋二，楊万里与“詩債”，第 8 回宋代文学国際学術研討会，2013 年 9 月 21 日，贛州師範学院（中国贛州）

浅見洋二，經典確立与改定—宋代文集編纂与改定，国際学者人文經典閲読与註釈論壇，2013 年 5 月 31 日，東華大学（台湾花蓮）

浅見洋二，宋代文本生成論之形成—從欧陽脩撰《集古録跋尾》到周必大編《欧陽文忠公集》，第 7 回宋代文学国際学術研討会，2012 年 9 月 18 日，河南大学（中国開封）

〔図書〕(計 1 件)

浅見洋二，堀川貴司，蒼海に交わされる詩文，汲古書院，2012，pp.351

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

なし

取得状況（計 0 件）

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅見 洋二 (ASAMI YOJI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70184158

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし